

指導資料

道徳科の全面実施に向けて ～指導と評価の要点及び実践事例～



兵庫県道徳教育実践推進協議会
兵庫県教育委員会

はじめに

これからの時代において、社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人間として生き方や社会の在り方について、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を模索し続けるために必要な資質・能力を備えることが求められています。今の子ども達やこれから誕生する子ども達が、成人して社会で活躍する際には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予測されています。子ども達一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが求められており、こうした資質・能力を育成するために、道徳教育はますます重要になっていると考えられています。

本県では教科化が決まった平成27年度以降「指導と評価は一体である」との考えの下、平成27、28年度は指導力向上、平成29年度はそれまでの取組に「評価」をテーマに加え、「道徳教育推進事業」を展開し、教科化に向けての取組を進めてきました。

この度、「道徳教育実践推進協議会」の協力のもと、これまでに道徳の教科化に向け配布した教員用指導資料「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて」の中から、もう一度確認していただきたい内容を精選し、本冊子にまとめました。

第1章は、道徳が教科化となるまでの「兵庫県の道徳教育」の歩みをまとめました。

第2章は、道徳科の授業の充実に向けて、本県がこれまで取り上げてきた内容を再掲しました。(1)では、「道徳科の目標」を分かりやすく説明、(2)では、教材分析シートを活用した「読み物教材の分析」について、(3)では、本県が推し進める「『対話』により深める授業を目指して」のポイントについて、(4)では、授業を構造的に理解し、改善点の発見につなげることができる「授業記録の活用」について、(5)では、「道徳科の評価」について説明しています。

第3章は、具体的な実践事例を紹介し、本県がこれまで取り組んできた道徳教育を具体的にイメージしていただけるよう工夫しています。

第4章は、本年度道徳教育拠点校育成支援事業実施推進地域及び推進校の取組成果の一部を焦点化して紹介し、各校の取組のヒントとなるよう構成しました。

各校においては、本冊子や教科化に向け作成した3冊の指導資料を活用した授業研究等を促進し、さらに道徳教育を一層充実させ、兵庫の児童生徒の豊かな心を育成されることを期待します。

最後になりましたが、本冊子を発行するにあたりご尽力いただきました「道徳教育実践推進協議会」の横山利弘委員長を始めとする委員の皆様、各推進地域等の皆様に深く感謝申し上げます。

平成31年3月

兵庫県教育委員会

【本資料の活用方法について】

道徳科に向けた指導資料については、平成27年度～29年度に作成した「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて①～③」をご活用下さい。本資料については、これまでの指導資料の具体的な実践事例を掲載し、各学校で取り組むことができるヒントを紹介しています。道徳科の充実に向け効果的に活用して下さい。

また、「道徳教育拠点校育成支援事業実施推進地域及び推進校の取組」は、今年度指定校の焦点化した実践事例の報告となっています。

目次

はじめに

1	兵庫県の道徳教育	1
2	道徳科の授業の充実に向けて	
(1)	道徳科の目標	3
(2)	読み物教材の分析 (授業前)	5
(3)	「対話」により、深める授業を目指して (授業場面)	6
(4)	授業記録の活用 (授業後)	7
(5)	道徳科の評価	9
3	実践事例	
	「対話」により、深める授業を目指して 【加古川市立別府小学校の実践事例】	11
	授業記録の活用 【福崎町立福崎西中学校の実践事例】	15
	道徳科の評価 【西脇市立重春小学校の実践事例】	19
	学校全体で取り組んだ道徳教育 【加西市立泉中学校の実践事例】	23
4	道徳教育拠点校育成支援事業実施推進地域及び推進校の 取組	27
	※道徳教育拠点校育成支援事業 各地域を牽引する教員の育成、または地域の中核となる学校づくりを推進する事業。	
5	内容項目の指導の観点	37
6	資料	39

1 兵庫県の道徳教育

本県ではこれまで学習指導要領及び「ひょうご教育創造プラン」に基づき、児童生徒の豊かな情操や規範意識、他者への思いやり等に関わる道徳性を育成するため、兵庫型「体験教育」と「道徳の時間」のそれぞれの特性を生かし、心の教育の基盤となる道徳教育の充実を図ってきました。

平成 20 年度 全県研修開始

- ・ 県内全ての道徳教育推進教師を対象とした全県研修を開始
- ・ 地域教材を開発・活用した「道徳教育実践事例集」を作成



(平成 20 年度)

平成 21～22 年度 兵庫版道徳教育副読本作成

- ・ 指導の手引き「『生命を尊重する心』と『規範意識』の育成」配布
- ・ 兵庫独自の副読本の開発
道徳教育のさらなる充実を図るため、兵庫ゆかりの人物・伝統文化・自然を取り上げた読み物資料に震災資料を加えた、兵庫版道徳教育副読本を作成 (平成 21～22 年度)



(平成 21 年度)

平成 23 年度～ 兵庫版道徳教育副読本活用開始

- ・ 道徳教育実践推進協議会の設置 (平成 23 年度～)
- ・ 兵庫版道徳教育副読本の活用を開始 (平成 23 年度～)



- ・ 副読本の配布にともない、教員用指導案を例示
※県教育委員会義務教育課HPからダウンロード可能
- ・ 道徳教育推進地域ごとに、副読本を活かした道徳の授業を実践研究
- ・ 副読本の効果的な活用をテーマとした全県及び地区別研修の実施

平成 27 年度 授業力向上を目指した研修

- ・ 道徳の教科化に向けた最重要課題として、授業力向上を位置付け、全県及び地区別研修では「模擬授業」を積極的に取り入れた実践的な研修
- ・ 教科化に向け指導資料「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて」を作成・配布

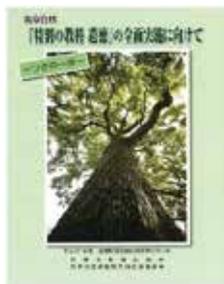
平成 28 年度 「授業記録」を活用した校内授業研修の充実

- ・ 「対話」を重視した授業を研究
- ・ 「授業記録」を活用した校内授業研修の充実
- ・ 教科化に向け指導資料「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて②～授業力を高める研修会の工夫～」を作成・配布

平成 29 年度 「評価」についての解説

- ・ 「評価」についての研究
- ・ 教科化に向けた指導資料「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて③～道徳科の指導と評価～」を作成・配布

これまでの「指導資料」 ※県教育委員会義務教育課HPからダウンロード可能



平成 27 年度



平成 28 年度



平成 29 年度

<参考 国の動き>

- 平成 26 年度～ 道徳教育用教材「私たちの道徳」活用開始
- 平成 26 年 10 月 中央教育審議会 「道徳に係る教育課程の改善等について」(答申)
「考え、議論する道徳」 道徳科への転換
- 平成 27 年 3 月 学校教育法施行規則を一部改正し「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として位置付けられる。(学習指導要領の一部改正告示)
- 平成 29 年 3 月 学習指導要領告示
- 平成 30 年 4 月 小学校「道徳科」全面实施
- 平成 31 年 4 月 中学校「道徳科」全面实施

2 道徳科の授業の充実に向けて

- ・学校における道徳教育は、道徳性の育成を目標としています。
- ・学校における道徳教育は、「特別の教科 道徳」（以下道徳科）を要として、学校の教育活動全体を通じて行います。そのため学校における道徳教育の全体計画及び別葉が必要となるのです。
- ・本書では、要としての道徳科の指導と評価の要点についてまとめています。

(1) 道徳科の目標

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

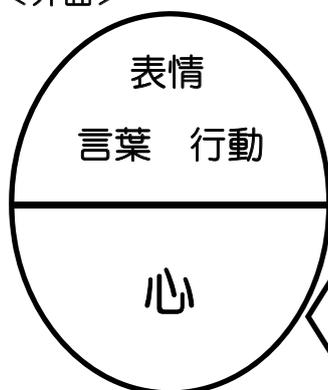
※（ ）中学校のみ記載

道徳性とは、よりよく生きるための人格的特性です。

それは、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度で構成されます。

一人一人の児童生徒が道徳的価値を自覚し、自己の（中学校：人間としての）生き方について深く考え、日常生活や今後出会うであろう様々な場面及び状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味します。

<外面>



<内面>

道徳性

道徳的実践意欲と態度

道徳的実践意欲とは、道徳的価値を実現しようとする意志の働きです。

道徳的態度とは、道徳的判断力・心情・実践意欲に裏付けられた道徳的行為への身構えです。

道徳的心情

道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情のことです。または、人間としてのよりよい生き方や善を志向する感情です。

道徳的判断力

それぞれの場面において善悪を判断する能力です。
つまり、人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力です。

道徳科の指導の原則

児童生徒が、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習をすることです。

「道徳的諸価値についての理解を基に」とは

道徳科の授業は、特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることではないことを示しています。

児童生徒は、授業開始時点で道徳的なことを自分なりにすでに知っています。この理解を基にして、授業をとおして、仲間の多様な考えに触れたり、仲間の考えと自分の考えを比べたりする中で、新しい理解に至ってこそ深い学びとなります。

「自己を見つめる」とは

教材に書かれていることを、自分のこととして受け止め、自分の考えを明らかにすることです。【主体的な学び】

「自分であればどんな気持ちになるか」、「どんなふうにか考えるか」、「どのようにしようか」など、当事者になったつもりで心の内を考えながら授業を受けることで、道徳的価値の理解と同時に自己理解を深めることとなります。

「物事を多面的・多角的に考える」とは

他の人の考えを聞き、自分の考えとつきあわせること（考えや意見の交流）です。【対話的な学び】

一人でものを考えるには限りがあります。他の人と「対話」をする中で自分の考えを確認したり、他者の考えから新しい気付きがあったりするものです。

ものの見方や考え方は人によって異なるものであり、道徳上のことは唯一絶対的な正解があるわけではありません。友だちの意見をよく聞き、自分の考えを語ること（対話）で、物事を一面的に捉えるのではなく、様々な視点から物事を理解できるようにすることが大切です。

「自己の生き方についての考えを深める」とは

授業で新しく獲得した価値理解（広がったり、深まったりしたこと）を基に自分の生き方を考えることです。【深い学び】

*なお、これは授業展開の順番を示しているわけではありません。

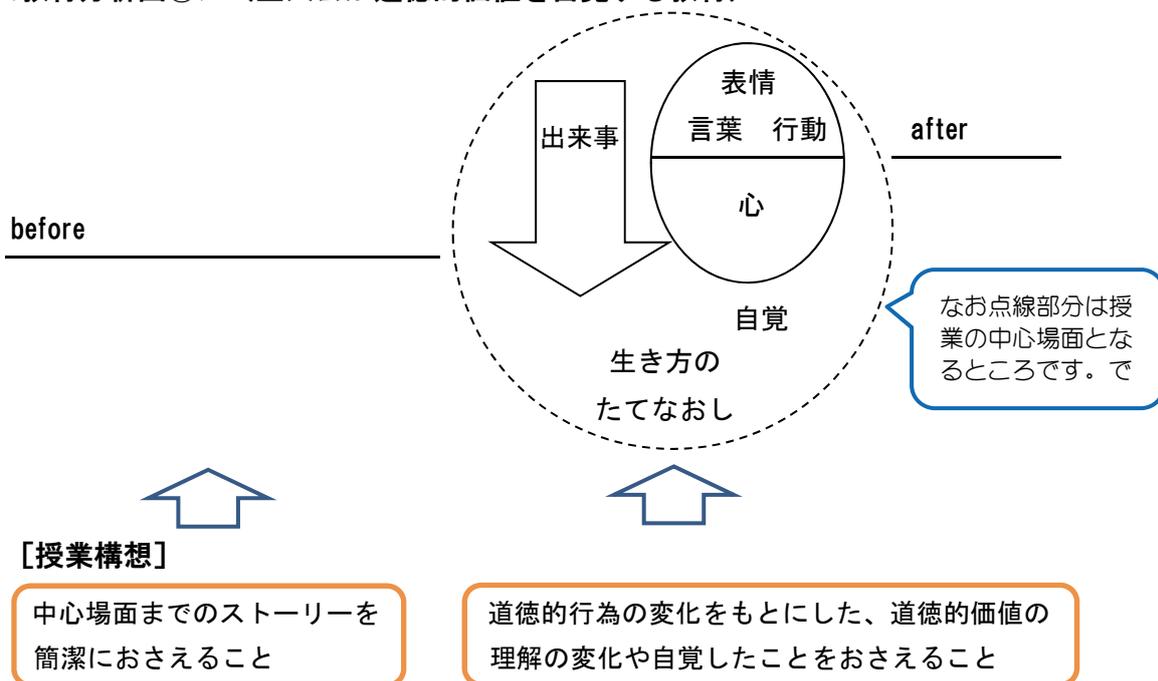
(2) 読み物教材の分析

授業において大切なことは、授業者が教材に描かれている人間の生き方や、そこに含まれる道徳上の問題（道徳的価値）をしっかりと読み取ることが必要です。つまり、読み物教材を使って授業をする場合、授業者がどれだけ深く教材を読んでいるかということが、授業を左右します。深く読むには、教材に盛り込まれた道徳的諸価値を明確に把握し、教材の構造を捉えることが有効です。

下の図は、構造の一例です。（構造はこの他にもあります）

※兵庫版道徳教育副読本に掲載されている読み物教材は、原則的にこの構造で作成されています。

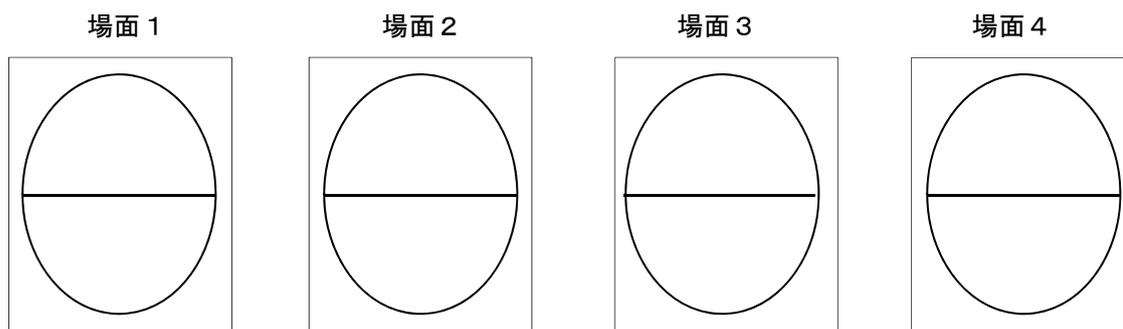
<教材分析図①>（主人公が道徳的価値を自覚する教材）



本県では、主人公が道徳的価値を自覚する教材を比較的容易に分析できるよう「教材分析シート」を示しています。

【詳しくは】平成27年度指導資料『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて』（P8～12）

<教材分析図②>（ストーリー全体で道徳的価値をとらえる教材）



場面の数は教材により異なります。

(3) 「対話」により、深める授業を目指して

実践事例
P11～14

授業開始時点での理解から、授業をとおして到達する新たな理解へ

教科の場合、児童生徒は授業を始める時点において、その授業で学ぶ内容について、まだ知らない状態です。そして授業をとおして理解します。そこに児童生徒の喜びがあります。

道徳の場合には、道徳的価値の新しい理解に至ったり、人間のよさに触れるところに児童生徒の喜びがあります。

主体的・対話的な学習により、多面的・多角的に生き方について考えを深める授業へ

道徳の授業では、道徳的価値や人間としての生き方について、自分事として捉え、多様な考えを出し合う対話的な授業の中で、多面的・多角的に自分の生き方について考えを深めやすくなります。

道徳の授業における「対話」とは、授業の中で自分の考えを発表したり仲間の考えを聞いたりする「他者との対話」や、心の中で仲間の考えと自分の考えを比べたり、それらをもとにさらに自分の考えを発展させたりして、自分自身と真剣に向き合うこと（「自己内対話」）を通して、自己の生き方や人間としての生き方についてさらに考えを深めることです。

「対話」のある授業をするために

中心発問の場面で「問い返し」をしよう

児童生徒の発言にしっかりと耳を傾けて心を聴きましょう。するともう少し聴いてみたいものが見えてきます。「何を言いたいのだろうか」「抽象的な言葉を使っているけれど、この子はそれをどのように捉えているのだろうか」「もっと詳しく聴きたいな」と、思うはずです。

それを児童生徒に問いましょう。児童生徒が語る本意を「聴く」ことから、様々な「問い」が生まれてきます。例えば、「やさしいってどういうこと？」「やさしいと親切は同じ？」「すごいこと言ったね。思いやりって何だろう？」など、道徳的価値に迫ったり、深めたりするための「問い返し」をしていきます。「誰がした？」「それからどうした？」「どこで？」など、場面を迫って細かく聞くだけでは、「問い返し」とは言えません。

また、道徳の授業は、教員と児童生徒が教材を使って共に考える時間です。児童生徒の言葉をじっくりと聴くための「問」をつくることも大切なポイントです。



Teachよりも名Catch

ポイント

道徳の授業で「話し合う」といいますが、児童生徒の発言に耳を傾け、そうかと承認することによって、児童生徒は育つものです。児童生徒の発言を「いいねえ」「素敵だね」「なるほど」と受容して、さらに問いを続けていくと、児童生徒自身が自分でもこんなことを考えていたのかと思えるような言葉が引き出されます。この時ずっと学級の空気が一変します。これが道徳の授業のねらいに迫っている時ではないでしょうか。

道徳の授業においては、教えること（teach）よりも、児童生徒の発言を受容（catch）し、共に考え、悩み、夢や感動を共有するという教員の姿勢が大切です。

(4) 授業記録の活用

実践事例
P15~18

授業力の向上を図るためには、授業を客観的に振り返り、具体的な改善の方向性を全員で共有する必要があります。振り返る材料となるのが「授業記録」です。

なぜ「授業記録」を取るのか

授業後の研修会で、参観者が授業の感想を述べ合うだけでは本当の授業改善には結びつきません。

教員の発問、児童生徒の発表やつぶやきなど授業の一部始終を記録した「授業記録」は、客観的な事実に基づいた授業を振り返る材料となります。この材料を研修会に参加している全員で共有し、共通の視点を基に考えることで、授業を構造的に理解し、改善点の発見につなげることができます。

「授業記録」の取り方

- 教員や児童生徒の発言すべてをそのまま書き留めます。
- 児童生徒の小さなつぶやきや、一斉に声を上げたことも記録します。
- 記録者が勝手に要約したり、まとめたりしないようにします。
- 複数で記録するとよりの確で詳細なものになります。
- 手書きでもかまいません。

※なかなか一言一句すべてを書き留めることは難しいですが、あるがままにすべてを書き取ることが基本です。学年や学校全体で取り組んでみましょう。



発問の吟味

ポイント

どう発問するかによって、児童生徒の考える深さは違ってきます。中心発問にいたるまでの前半の問いは、書いてあることを答えてストーリーが分かればよいのです。しかし、中心発問は、授業の「ヤマ」ですから、ねらいに迫る必要があります。ここで、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えが深められる発問が用意されなくてはなりません。児童生徒が道徳の授業が面白い、楽しいと感じるのは、『考える』からです。教材に書かれていることを答えるだけでは児童生徒は満足しません。児童生徒の欲求に応えるために、中心発問の吟味は最も重要です。

「授業記録」を分析する視点（例）

「授業記録」を分析すると、例えば「時間配分は適切であったか」「教員が一方的に話していないか」「一問一答の授業になっていないか」等、その授業における成果や課題をたくさん見つけることができます。

次に授業後の研修等で「授業記録」を分析する大切な視点の例を示します。

- ① 児童生徒は、ストーリーを正しく捉えることができたか。
- ② 教員の問いが明確に児童生徒に伝わっていたか。
- ③ 教員は、児童生徒の発言をきちんと受けとめていたか。
- ④ 教員の問い(発問)は、ねらいに迫るために本当に有効な問い(発問)であったか。
- ⑤ 教員の問い返しは、より深く考えるために有効であったか。
- ⑥ 児童生徒は、道徳的価値について多面的・多角的に考え、発言することができたか。
- ⑦ 児童生徒は、道徳的価値の理解を深めることができたか。
- ⑧ 児童生徒は、自分自身との関わりの中で、自己の(人間としての※)生き方について考えることができたか。

※中学校

<校内研修にあたって>

校内研修においては、①～⑧を適宜活用して授業改善を図りましょう。

【詳しくは】平成28年度指導資料『『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて②』（P10～20）

道徳科における評価の基本的な考え方

道徳教育の目標は、道徳性（道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度）を養うことです。しかし、道徳性は内面的資質であり、道徳性が養われたか否かは容易に判断できません。また、どれだけ道徳的価値を理解したかなどの基準を設定することもふさわしくありません。

そこで、道徳科の「学習活動」に着目し、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要があります。

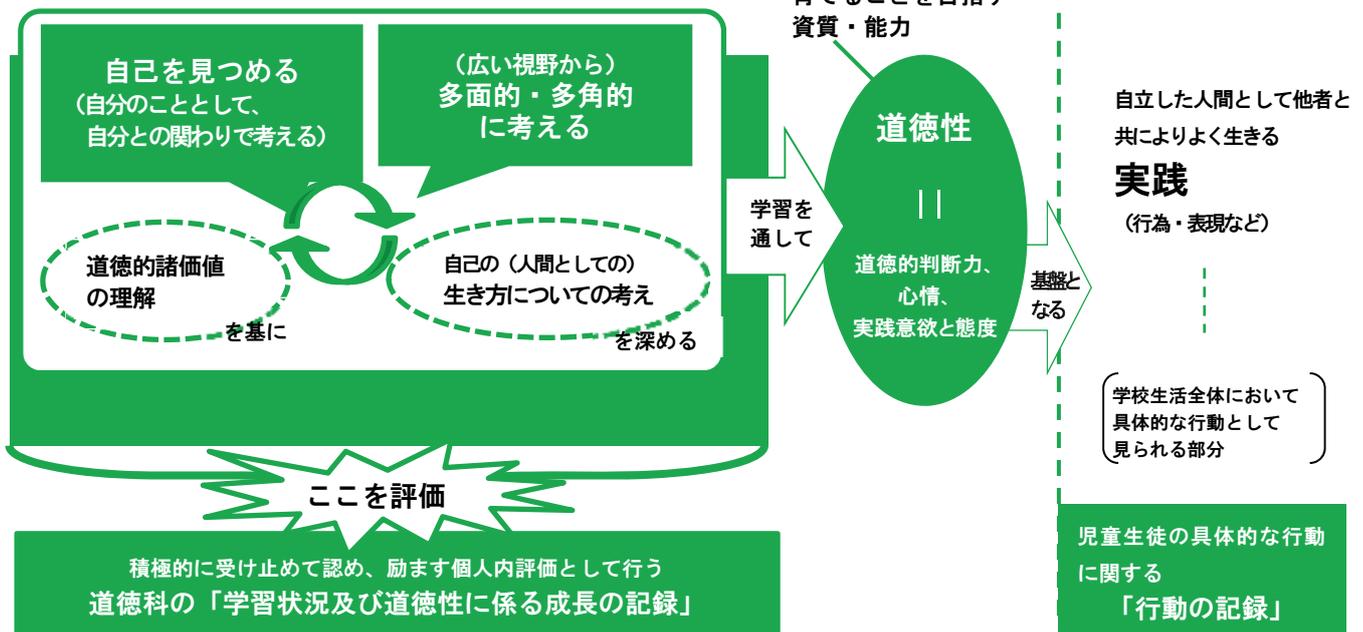
評価に向けては、教員と児童生徒との人格的な触れ合いによる共感的な理解が存在することが重要です。その上で、児童生徒の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、児童生徒が自身の成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指します。

- 個々の内容項目については、評価しません。
- 数値ではなく、記述式とします。
- 評価の視点として、学習活動において児童生徒が、①一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、②道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視します。
- 発達障害等のある児童生徒に対する指導や評価を行う上では、それぞれの学習の過程で考えられる「困難さの状態」をしっかりと把握した上で必要な配慮が求められます。
- 道徳科の評価は、入学者選抜とはなじまないものであり、調査書には記載せず、入学者選抜の合否判定に活用することのないように、しなければなりません。

(学習指導要領解説第5章第2節2(1)(5)参考)

道徳科の学習活動と評価のイメージ

道徳性を養うために行う道徳科における学習



※道徳科の学習活動を中心にイメージ図としたものであり、これ以外にも道徳性を養う過程は様々なものが考えられます。

道徳科の評価は、道徳の授業における学習状況や道徳性に係る成長の様子についての評価となります。一方、学校生活の中で見られた児童生徒の道徳的実践（行動等）は、指導要録の「総合所見」欄または「行動の記録」欄に記述することになります。

つまり、道徳科の評価と「総合所見」欄及び「行動の記録」欄は、きちんと切り離して評価する必要があります。

例えば、「忘れ物が少なくなりました」「掃除を一生懸命取り組むようになりました」「困っている友だちを助けることができました」など、学校生活において行動として現れたものは「総合所見」欄、または「行動の記録」欄に記述することになります。

道徳科の評価に向けて重視する2つの視点の具体例

「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」の視点の例

- ・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。
- ・自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。
- ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。等

「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」の視点の例

- ・読み物教材の登場人物を自分自身に置き換えて、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。
- ・現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している。
- ・道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。等
(学習指導要領解説第5章第2節2(2)より)

評価の妥当性・信頼性の確保に向けて

道徳科の評価を推進するに当たっては、学習評価の妥当性、信頼性を担保することが重要です。評価は、個々の教員が個人として行うのではなく、学校として組織的・計画的に行う必要があります。

例えば、学年ごとに評価のために集める資料や評価方法等を明確にしておくことや、評価結果について教員間で検討し評価の視点等について共通理解を図ること、評価に関する実践事例を蓄積し共有することなどが重要です。

さらに、年に数回教員が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行うといった取組は、児童生徒の変容を複数の目で見取り、評価に対して共通認識をもつ機会となるものであり、評価を組織的に進めるための一つの方法としても効果的であると考えられます。

(学習指導要領解説第5章第2節2(4)より)

【詳しくは】平成29年度指導資料『『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて③』(P12～22)

3 実践事例

「対話」により深める授業を目指して 【加古川市立別府小学校の実践事例】

1 研究主題と内容

「道徳的価値に照らしながら対話で深める道徳科の授業づくり」

■「主体的・対話的で深い学び」を指導過程に組み込む

道徳的価値に照らしながら、対話を通して自己の生き方について考えを深め合う道徳科の授業づくりを目指して、別府小式指導案では鍵となる視点を指導過程に位置付ける。

3つの鍵となる視点を、主体的な学び（主）、対話的な学び（対）、深い学び（深）とした。

■対話で深める授業づくり（実践紹介：「神戸の水」）

ねらいに迫る効果的な指導方法を生かし、道徳的価値について多面的・多角的に考えられるよう、よりよい生き方につながる「考えたくなる問い」や「意味のある問い」を吟味し、対話で深める授業づくりを目指した。

■子どもの心を育む環境づくり

道徳科の学びが教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての役割を果たすために、毎時間の学びの足跡を教室に掲示することや、道徳通信の発行を実施することにより、道徳科の学びを学校生活や家庭において「対話」を促す環境づくりを図った。

2 実践事例 「神戸の水」

- (1) 教材名 神戸の水（出典：兵庫版道徳教育副読本「心きらめく」）
- (2) 主題 自然と共に生きる（D-19 自然愛護）
- (3) ねらい

ペットボトルをしまったわたしの気持ちを考える学習を通して、自然のもつ美しさやすばらしさに感動し、自然やその中に生きる動植物を大切にすることについて多面的・多角的に考え、自然や動植物との関わりを大切にしようとする道徳的心情を主として育てる。

(4) 評価の視点

- ・わたしの心の動きを考えることを通して、自然やその中に生きる動植物を大切にすることについて多面的・多角的に考えを深めようとしている。
- ・自然やその中に生きる動植物との関わりを大切にすることについて、自分のこととして捉えようとしている。

【本時における対話で深める指導方法等の工夫】

●体験活動を生かす

- ・意図的に年間指導計画の中に「布引の滝」への校外学習を計画。
- ・実際に、児童が「布引の滝」を見た体験を通して、自然のもつ美しさやすばらしさを感じることにより、自然やその中に生きる動植物を大切にすることについて多面的・多角的に考えられるようにした。

●情報機器の活用

- ・導入で撮影してきた「布引の滝」の動画を用い、児童の体験を想起させることで、登場人物の気持ちにより近づけ、自然に対する多様な思いに触れやすくすることができるようにした。

●授業形態

- ・児童が発表者の顔を見て友だちの考えを聴き話し合えるよう児童の机をコの字型に配置した。

3 「神戸の水」 一鍵となる視点を位置づけた別府小式指導案一

	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点・評価方法
導入 (7分)	<p>1. 範読を聞き、神戸の水について話し合う。</p> <p>わたしが、布引の滝を見たとき、どんなことを感じたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水が透き通っていてきれい。 ・迫力のある滝と自然の力を感じたよ。 	<p>Point</p> <p>(主) 布引の滝の美しさや水の迫力を動画から想起させ、児童の体験を通して感じたことを、わたしの思いに重ね本時の学びに主体的に向き合えるように意識付けをする。</p>
展開	<p>2. わたしの気持ちについて考える。</p> <p>ペットボトルを入れようとした手が止まったわたしは、どんなことを考えていたのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・濁って汚いし持って帰るのは重くて嫌だ。 ・見られないように流そうかな。 ・少しぐらい大丈夫だろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校外学習での体験活動を通して感じたことを基に、滝の美しさやすばらしさに感動し、絵を描き始めたわたしの気持ちを想像させる。 ・濁った水の入ったペットボトルを見せ、持ち帰ることを面倒に感じ、思い留まるわたしの気持ちを多様に出させる。
授業の「山場」↓ 対話で深める(20~25分)	<p>「そうや、そうやった。」とペットボトルをしまったわたしは、心の中でどんなことを考えていたのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校で捨てる約束を破ってしまうところだった。 ・きれいな滝の水を描いたのに、自分の勝手な思いで布引の滝を汚すなんていけない。 ・滝の水の美しさや迫力に感動したことを忘れてしまっていた。 ・水を汚すことで、その中に生きる動物や植物の生活や命にまで影響が出てしまう。 ・自然を人間がそう簡単につくりだすことはできないから。 →もう少し詳しく教えて。 	<p>Point</p> <p>(対)(深) 中心発問等を生かしペットボトルをしまうわたしの思いを考えさせ、友だちとの対話により、動植物が自然環境の中で生きていることや、人間の生命も自然に守られていることに気付かせ、自然や動植物との関わりを大切にすることについて考えを深めさせる。</p> <p>補1 人ぐらい水を流してもよいのではないのかな 補2 どうして自然の水は汚したらいけないのかな</p>
	<p>背中荷物は重いのに、足取りが軽くなっていくように感じたわたしは、どんなことを考えながら坂道を下ったのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美しい自然を汚さなくてよかった。 ・心が気持ちいいな。自然っていいな。 ・いつまでも美しい滝であって欲しいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足取りが軽くなっていくように感じたわたしの気持ちを考えさせることを通して、自然の美しさやすばらしさを感じ、大切にしていこうとする思いに気付かせる。 ・大型モニターを用いて体験活動での児童が自然に親しむ様子を見せることで、自然と人とのつながりを身近に感じさせる。
終末 (5分)	<p>3. 本時の振り返りを書く。</p> <p>今日の学習で、わたしから教えてもらったことを書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然と人は繋がっていることが分かった。 ・自然のおかげで、動物や植物が生きていけることに気付いたよ。 ・自然の美しさをみんなで守っていきいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わたしの心のすがすがしさに共感させ、人と自然とのつながりや、自然の美しさを感じられるよう、せせらぎの効果音を流し、本時の学びをワークシートに書かせる。 <p>【評価方法】 道徳ワークシート・発言・観察</p>

※ 3つの鍵となる視点を意識して指導する場面には、(主)・(対)・(深)というゴシック太字を明示し、それに基づく留意点を記している。

※ 指導の在り方によっては、(対)(深)というように並列で記し連動させた指導も考えられる。

※ 補は、補助発問である。

4 板書例と指導の流れ



5 対話で深めるプロセスとポイント

Point

(指導案の二重線枠部分)

中心発問：「そうや、そうやった。」とペットボトルをしまったわたしは、心の中でどんなことを考えていたのでしょうか。

児童の反応：神戸の水が世界一のおいしい水ではなくなってしまう。
自分達が汚すのはいけない。あの時の感動を思い出したから。

(問い返し) あのときの感動って？

(略)

補助発問：1人ぐらい水を流してもよいのではないかな。

児童の反応：そういう人がいると、汚す人が増えてしまう。
汚してしまうと誰もこない滝になってしまう。
それは自然を守っていることにはならないな。

補助発問：どうして自然の水は汚したらいけないのかな。

児童の反応 A 児：自然がこわれてしまうから。
B 児：自然には生きものが生きているから。

(問い返し) Bさんの考えについて、みんなはどう思う？

児童の反応 C 児：Bさんの意見から、生き物と自然って繋がっていることに気付いたよ。
D 児：自然を人間がつくりだすことはできないから。だから汚したらいけないと思う。
E 児：1つ自然を汚すと、それが広がり、最後には人間に返ってくるから、自然を大切にしたいと思う。



【他者との相互作用を対話で活かす学習の様子】

【対話で深めるための指導のポイント】

Point

- 展開場面で授業の「山」をつくり、十分に考えさせ対話する時間（中心発問で20分～25分）を確保する。そのため、朝の学習等で範読を行うことや家庭学習で本読みをすることもある。
- 教員が、教材研究を通して道徳的価値についての理解を深め、本時で「何をどこまで深めるか」を明確にもったうえで、対話で深める問いを吟味する。
- 対話で深める場面では、一問一答の発問や教科書に書かれていることは、基本的には問わない。
- 発表者を見て聴き合う子どもの姿や、子どもと共に考えようとする教員の姿、聴き合える学習形態等を大切に「対話の見える化」を意識する。
- 教員は、「中心発問」や「補助発問」を生かし、子どもの発言の意味や思いを受容（Catch）し、対話をコーディネートしながら対話を深め、温かな道徳授業を目指す。

【対話を深める問い返し】

「〇〇さんの考えについてどう思う？」、「自分の言葉で話してみよう」、「もう少し詳しく教えて」、「どうして、そう考えたのかな？」、「なるほど」、「深い考えだね」等。

6 子どもの心を育む環境作り

■対話を通して生まれた「学びの足跡」

授業の終末では、本時の学びを道徳ノート等に感想などを記述することが多いが、それを語り合う時間をとることが難しい。



挿絵と本時の主題に関わる児童の言葉を、ワークシートや授業中のエピソードをもとに、「学びの足跡」として教室に掲示し、生活の中での対話に活かす取組を行っている。



- ・ 授業での対話から生まれた学びを、実践に向かおうとする意識や意欲の高まりが期待できる。
- ・ 学びを振り返ったり関連価値と関係づけたりできることから多面的・多角的に思考するための手立てにもなっている。



「学びの足跡」



「道徳通信」（各学年より毎月発行）

【加古川市立別府小学校の取組】

道徳科において求められる指導方法の工夫は、今回の学習指導要領の改訂を先取りしているとも言える。即ち、道徳科においてこそ「主体的・対話的で深い学び」が求められるのではないかと。別府小学校の取組の目はそこにある。

「別府小式指導案」では、（主）・（対）・（深）というゴシック太字によって、敢えてその3つの鍵となる視点を意識して指導しようとしている。もちろん、この形式化を求めているわけではない。また、授業の「山場」では「対話で深める」ことを意識した指導のポイントを明らかにしようとしている。けれども、実際にはこの山場（20～25分）をどのように進めるか、先生方にとってはそんなに容易なことではない。予定通り進むことが対話ではないが、だからといって授業を入念に構想しておかないとねらいに迫ることはできない。「対話で深める」にはどうしたらよいのか、先生方自身がその大海に船出するためのヒントが、この研究実践の軌跡の中にいくつも埋め込まれている。

道徳教育実践推進協議会 副委員長

谷田 増幸

授業記録の活用

【 福崎町立福崎西中学校の実践事例 】

1 研究主題と内容

「教材分析シートの作成と授業記録の分析による実践」
 ～「対話」により道徳的価値の理解を深める授業を目指して～

POINT

■教材分析シートを活用した指導案の作成（授業前）

読み物教材を使ったすべての道徳の時間において教材分析シートを作成し、教材を構造的にとらえ、教材分析シートに基づいた学習指導案を作成する。

■「対話」により授業を深める（授業）

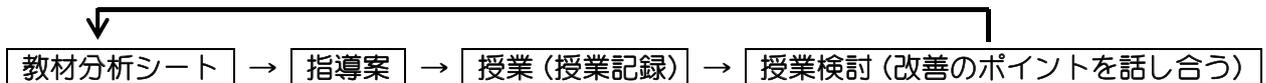
他者との対話や自己内対話をとおし、多面的・多角的に考えを深めるとともに、中心発問での「問い返し」により道徳的価値に迫る。

■授業記録の分析（授業後）

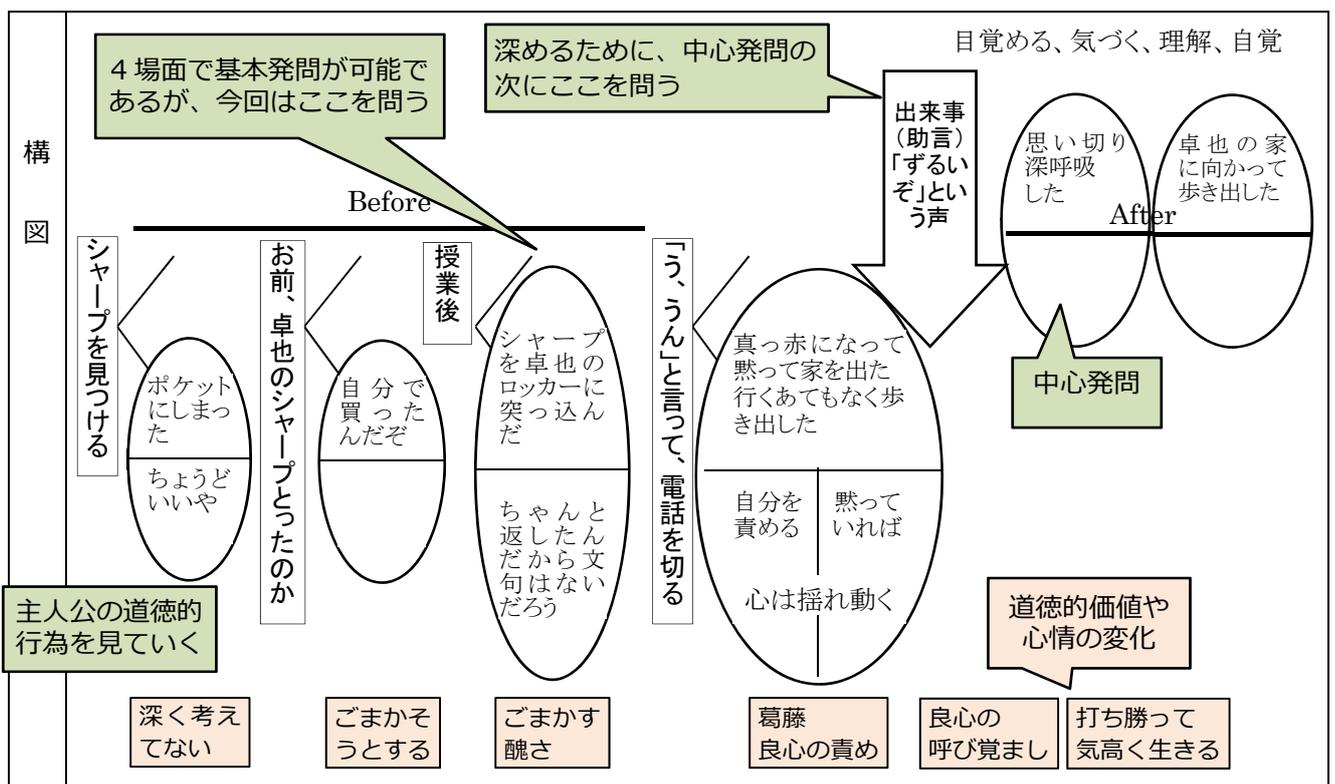
誰でも授業記録を取ることができるようにするとともに、授業の流れや生徒の発言に対して「受容」できているか、「問い返し」が適切であるかを分析する。

対話のある授業を進めるための5箇条の心得

- 教材の言葉で発問する。
- 発言する生徒の近くに寄る。
- 中心発問は、繰り返して発問する。
- 板書は考えを助ける程度にシンプルに。
- グループでまとめたりワークシートに書いたものを発表させたりしない。



2 教材分析シート〈銀色のシャープペンシル〉



3 学習指導案（略案の一部）

1	主 題	よりよく生きる喜び D- (22)	
2	教材名	「銀色のシャープペンシル」(出典：廣済堂あかつき「中学生の道徳1-自分を見つめる-」)	
3	ねらい	「ずるいぞ」という声を聞いて、変化するぼくの心を通して、自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだそうとする道徳的心情を主として育てる。	
4	学習展開		
	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	
	指導上の留意点		
導入	<ul style="list-style-type: none"> 授業に関心を持つ。 	「生きる」と黒板に書く。	
展開	<ul style="list-style-type: none"> 教材を読む。 ぼくの醜い心を考える。 よりよく生きることを決意したぼくの心を考える。 	<p>シャープペンシルを卓也のロッカーに突っ込んだとき、ぼくはどんなことを考えていましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ちゃんと返したから文句ないだろう。 これでバシないで終わることができた。 なかったことにしよう。 <p>思い切り深呼吸をしながら、ぼくはどんなことを考えていましたか。</p> <p>(1)卓也に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> 謝ろう。・すぐに電話をかけてくれたのに。 <p>(2)自分</p> <ul style="list-style-type: none"> 何て情けない人間だ。・いつもごまかして生きている。・自分の弱い心を克服したい。・今話さないと自分は一生後悔する。 <p>(3)よりよく生きる</p> <ul style="list-style-type: none"> 他人のせいにする生き方をこれからはしない。 正しい生き方をしたい。・もっと人としてよりよく生きる。 <p>「ずるいぞ」この声は、誰(何)の声ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ぼくの心の声・良心・もう一人の自分の声・神様の声・仏様の声・天からの叫び・正義の声 	<p>POINT</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教材を範読する。 基本発問の数を少なくし、間の場面はかいつまんで説明することで中心発問の時間を確保する。 ○ぼくの弱くて醜い心を見つめさせる。 ○人間の弱さを克服することのすばらしさ、気高く生きることの素敵さを共有する。 ☆補助発問 ぼくが吐きだしたもの・吸い込んだものはどんなものか。 <吐きだしたもの> 醜い心、弱い心、悪い心、卑怯な自分、等。 <吸い込んだもの> 正義、誠実、正直、良心、勇氣、等。 ○ずるいぞという声・深呼吸で吐いたもの・吸い込んだものを考えることで、よりよく生きることを決意したぼくの心の気高さに共感させる。
終末	<ul style="list-style-type: none"> 感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習を通して感じたことや考えたことを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○感想用紙に記入させる。

【授業の検討1】 (※1回目の授業検討会より。授業記録等からの分析。)

- 1回目の中心発問で、「相手のせいにしたので改めよう」、「謝ろう」までは出るのだが、なかなか自分の弱さ醜さまでいかない。そこで「ずるいぞ」を考えさせるんだけど、どういう問い方がいいのか。「何がずるい？」ではずるさの事柄に終始してしまう。「誰の声？」と問い直したとき、自分の声と最初に答えたときに、「自分の声って何」ともっと問い返すべきだった。
- 「ずるいぞって誰の声？」と聞いた時、「章雄の本心」と言った。この本心を問えばよかった。
- 「ずるいぞ」を「何の声なんやろ」と言ったところから時間がかかったが、「目覚めて」が出た。ここからもっと、何に目覚めたのか聞いたらよかった。問い返しがまだ不十分。
- 「ずるいぞ」から2回目の中心発問に戻った時も、「謝る」が多い。辛抱強く中心発問を繰り返し出てきた「心を改めよう」をどういふことかもっと問い返すとよかった。

4 授業記録（2回目の授業より。中心発問の部分から抜粋）

20 '30	<p>■思いっきり深呼吸をしながら、ぼくはどんなことを考えていましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本当のことを言おうと。本当のこととは？ ・シャープをとったこと、本当のことを言おうと思った。 ・自分も謝ろう。 Cさん。 <p>・相手のせいにしたから？自分も悪い謝ろう。</p> <p>■思いっきり深呼吸しながら、どんなことを考えていましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正直に言って又仲よくしていこう。 <div style="border: 1px dashed red; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p style="text-align: center; color: red;">中心発問を繰り返 し、考えることを 明確にする。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・しっかり謝ろう。 ・ありましたね。人のせいにして。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・本当のことを言おうと思った。
		A B	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がシャープをとったこと。 ・自分も謝ろうと思った。
		C	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も悪いのに相手のせいにしたから謝ろうと思った。
		D	<ul style="list-style-type: none"> ・次の日はちゃんと正直に言って、また普通に仲よくしようかと思った。
		E	<ul style="list-style-type: none"> ・理科の授業の時に正直に謝っておけばこんなことにはならなかったのに、その時謝れなかったこともしっかり謝ろう。
		F	<ul style="list-style-type: none"> ・合唱コンクールの時も自分も練習していないのに人のせいにして。
		F	<ul style="list-style-type: none"> ・自分もやってないくせに周りのせいにして、今回のシャープのことも一緒やな。
<p>この後 12 人の発言が「正直」「謝る」の意見ばかりなので「ずるいぞ」を考えさせる</p>			
31 '00	<p>■「ずるいぞ」って誰の声ですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心の声。 <p>・あ、そう、後ろにおらんかったんやな。</p> <p>・どういうこと？</p> <p>・自分でずるいと思って？</p> <p>・どこから聞こえた？</p> <p>・心から。</p> <p>・もう一人の自分て、どこに出てきたかなあ。</p> <p>・さっきまでさやいていた自分ですか？</p> <p>・もう一人の自分って何？</p> <p>・心の中にもう一人の自分がいるんですか？</p> <p>・心の中の悪魔が黙っとけと言う。ずるいぞって言ったのは？</p> <p>・悪魔がまた言う？ずるいぞって。</p> <p>いい人があるんか？</p> <p>・心の悪魔と心のいい人。</p> <p>天使。心の天使。悪魔のほかにはない。</p> <p>・神。神の声。ずるいぞは神の声か。神様の声が聞こえる。</p>	H H E I I I I J E C C H B E K E	<ul style="list-style-type: none"> ・友達。えっと、(クラスの中から) 心の声。 ・えっ、そうなん？ あ、そこか。 ・だって、後ろに誰もおらんかったもん。 ・自分の心。 ・自分の心で。自分のことはずるいって、自分で思っている。 ・思って、その声が聞こえた。 ・心。 ・もう一人の自分の声。 ・もう一人の自分が卓也が勘違いだと言っているんだからこのまま黙っていればいい。(数名が) 心。自分の中の心。 ・悪魔。 ・心の中の悪魔。 ・自分。 ・悪魔 ・いい人がずるいぞって。 <p style="text-align: center;">(クラスの中から) 天使。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神やろ。神。 ・すげえなあ、神様の声って。
<p>この後、「ふと目をあげるとの空にオリオン座が見えた。・・・すべての星が自分に向かって光を発しているように感じる。ぼくは思い切り深呼吸した」の部分を読んで中心発問に戻る</p>			
35 '30	<p>■ぼくは思い切り深呼吸をしながらどんなことを考えていますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・謝りに行って？ <div style="border: 1px dashed red; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p style="text-align: center; color: red;">中心発問に戻る</p> </div> <p>・今までの自分をやめて正直に。取った子のことを信じてた。</p> <p>・ええやんと思って、弱い心。</p> <p>・認めなかったから。</p>	K K L M	<ul style="list-style-type: none"> ・卓也に正直に言って、謝りに行って。 ・もともと他人のことばかり悪いように言うて、自分がいいように考えとったのをやめて、これから正直になろう。 ・卓也は、とった子のことを信じとったんやけど、自分は卓也を裏切ってしまった、電話かかってきたとき文句やろと思ってたけど勘違いやって謝ってきて、掃除のときにシャープン拾って、自分もその時なくしとったからええやんと思って、その時弱い心があってそれでとってしまったから。 ・卓也は間違いを認めて謝ってきたけど自分は人の悪口ばかり言って認めなかった。

【授業の検討2】 (※2回目の授業検討会より。授業記録等からの分析。)

- 1回目、2回目の授業でも、最初の中心発問では、生徒から「謝る」「正直」ばかりがでていた。次に「ずるいぞ」を問うと、2回目の授業では、「自分の心の声」で考えていくことができた。1回目の授業で、「ずるいぞ」を問うた時に、生徒の「自分の声」への反応が不十分だった反省が生かされていた。
- 授業者が、「ずるいぞ」一本で組み立てていこうとしたと言っていたが、それでよかったのではないか。「ずるいぞ」を問うた時、授業者は生徒の発言に対してよく問い返している。授業記録を見ると、授業者が「〇〇〇？」と問っているのがわかる。
- 「ずるいぞ」を問うた時に、「自分の心の声って何」、「悪魔や天使ってどういうこと」、「神様はいるの」ともって問い返したら、人間の弱さ醜さとかが出たのではないか。そして、それを乗り越えてよりよく生きるが考えられたのではないか。
- より深く考えるための有効な問い返しの研究が必要である。

5 成果と課題

- 授業記録をとることで、授業者がどのように生徒の発言を受容しているか、あるいは授業者の癖も分かる。道徳的価値に迫るために、ここをさらに問い返して見たらどうかの指摘に納得できる。
- ローテーション授業で記録をとると、授業研究会をしなくても自分で見返して問い返しの必要なところを自分で見つけられるようになる。
- 授業記録をとるために人手が必要である。担任以外の教師も含めたローテーション授業をうまく活用したい。
- 教師は発言する生徒の近くまで行き、その発言を「受容」し、言葉にし切れていない本意を聴くための「問い返し」を大切にした授業を進めてきた。すると普通の学校生活においても、生徒達に「先生は自分の話を聞いてくれる」「気持ちを分かろうとしてくれている」という雰囲気が生まれ、教師達も生徒の内面からの指導を大切にする雰囲気が醸成されてきた。「対話」により道徳的価値を深める授業の取組を進めていくことで、教師と生徒との信頼関係が深まっていったことは間違いない。



【授業検討会の様子】

【福崎町立福崎西中学校の取組】

授業記録を取る意味は授業改善に役立てることにある。授業記録は、子どもの発言のキャッチと問い返しによって対話のある授業になっているのか、そして道徳的価値を深める授業になっているかを検討する材料となる。

授業記録を取るには人員が必要という課題を抱えながらも、ローテーション授業を生かして一つの教材の授業記録を二回取ることで有効な問い返しの意見を出し合っている。二回目の授業では問い返せなかったことを、すべてのはずさずできなかったにしても次に生かす準備が可能である。また、授業記録の分析をすると、有効な発問ではなかった、つまり教材分析の不十分さ、さらに教材の読みを深める必要性に気付いたこともあったはずである。

福崎西中学校の、分析シートによる教材の読み↓対話のある授業↓授業記録の「循環」は、道徳的価値を深める授業の基本である。

本当に子どもの発言、発言の裏にある思いを聞こうとすると自然に熱が入り、側に寄りたくなる。子どもはこんなことを考えているんだ、すごいなあと共に考える道徳の授業をさらに楽しんでいただきたい。

道徳教育実践推進協議会 委員

行本 美千子

道徳科の評価

【西脇市立重春小学校の実践事例】

1 研究主題と内容

「いかそう評価 つくろう授業！！」～授業改善につなげる評価～

■学習指導案作成にあたって

道徳科における評価の考え方

■学習指導案

評価の視点を入れた授業づくり

■授業記録と発言からの見取り

評価の視点Ⅰと視点Ⅱをもとにした見取り

■記述とヒアリングからの見取り

評価の信頼性を高めるための工夫

■見取りの生かし方

見取りを生かした次の授業への改善策



2 学習指導案作成にあたって

【ねらいについて】

- ねらいとは、道徳科の内容項目をもとに、教員が迫りたい道徳的価値や道徳性の諸様相を端的に表したものである。
- 道徳性が養われたか否かは容易に判断できないため、ねらいを達成できたかどうかを評価するのではなく、学習のプロセス（過程）を評価する。
- 学習のプロセス（過程）を評価するには、以下の二つの評価の視点とねらいとの整合性を図ることが重要になる。

【評価（見取り）の視点】

■視点Ⅰ：多面的・多角的な見方へと発展しているか。

他者の意見や立場を理解しようとしたり、道徳的な問題に対する判断の根拠やその時の心情を様々な視点から捉え考えようとしたりする姿を見取る。児童が互いに思いを「聴き合う（対話する）山場」を設定し、さらに考えを深められるよう「補助発問」を想定しておくことで、より明確に見取ろうとしている。

■視点Ⅱ：道徳的価値を自分との関わりの中で深めようとしているか。

登場人物を自分に置き換えて、自分なりにイメージして理解しようとしたり、自分の経験をもとに、道徳的価値について考えようとしたりする姿を見取る。終末に授業をふり返る時間を設定したり、児童にヒアリングを行ったりすることで、一人一人の考えの深まりを見取ろうとしている。

3 学習指導案（第4学年）

- (1) 主題名 あきらめない気もち
 (2) 教材名 いつか必ず役に立つ ー大上宇市ー
 (出典：兵庫版道徳教育副読本「心きらめく」)
 (3) 内容項目 Aー(5) 希望と勇気、努力と強い意志
 (4) ねらい 宇市が自分の研究はいつか必ず役に立つという信念をもって、研究をあきらめなかった理由を考えるを通して、強い意志をもち最後まであきらめずに、粘り強くやり抜こうとする道徳的心情を育てる。
 (5) 展開

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導 入	・宇市が書き記した観察記録の写真を見る。	これは何の写真かな。 ・植物や昆虫の絵がかいてあるな。 ・古い本だな、昔の図鑑かな。	・宇市が書き写した記録書の写真を見ることで、教材に興味をもてるようにする。
展 開	・教員の範読を聞く。 ・自分が感じた感想を出し合う。 ・思うように上手くいかないときの宇市の気もちを考える。 ・宇市があきらめずに続けられた理由を聞き合う。	どんな感想をもったかな。 ・あきらめず、研究してすごいと思った。 ・世界で有名になってすごいと思った。 思うように上手くいかなかったとき、宇市はどんな気もちだったのかな。 ・本当にこまったな…どうしよう。 ・もう無理なのかな。 ★聞き合う山場 宇市が、今、自分ががんばっていることが将来、役に立つのかわからないのに続けられたのはなぜかな。 ・努力はいつか役に立つと思うから。 ・いつか成功するかもしれないから。 ・宇市には目標があったから。 ・目標はゴールみたいなものだから、あったらあきらめずにすむと思う。 ・目標をあきらめることもあると思う。	・発表の際、相互指名をさせていくことで、お互いの思いを聴き合えるようにする。 補助発問 目標がなければ、がんばれないの？ みんなは、目標ができたとしたら、がんばることができる？
終 末	・ふり返りを書く。	今日の学習で自分が思ったことや考えたことを道徳ノートに書きましょう。 ・自分を信じて決めたことを続けるといつか目標が達成できると思った。 ・自分はすぐにあきらめてしまうが、これからは少しでも苦手なことにチャレンジしてみようと思った。	・落ち着いてふり返りが書けるように、十分に時間を確保する。

★児童の学習状況及び道徳性に係る成長を見取る視点

視点Ⅰ：多面的・多角的な見方へと発展しているか。

○宇市が研究をあきらめなかった理由を多面的・多角的に考えているか。

視点Ⅱ：道徳的価値を自分との関わりの中で深めようとしているか。

○研究をあきらめなかった宇市と自分を照らし合わせて、自分の生活を見つめ、ふり返りながら考えようとしているか。

4 授業記録からの見取り

POINT

【評価（見取り）の視点】

視点Ⅰ：多面的・多角的な見方へと発展しているか。

○宇市が研究をあきらめなかった理由を多面的・多角的に考えているか。

視点Ⅱ：道徳的価値を自分との関わりの中で深めようとしているか。

○研究をあきらめなかった宇市と自分を照らし合わせて、自分の生活を見つめ、ふり返りながら考えようとしているか。

【授業記録（一部抜粋）】

教員の発問	児童の発言（全体でのつぶやき）
<p>宇市が、今、自分ががんばっていることが将来、役に立つのかわからないのに続けられたのはなぜかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・有名にならんかったらなあ。 ・未来は、わからんのに。 ・認められたら、どう思ったんやろう。 ・目標があったん？ <p>(A) 将来研究していることが役に立たなくても、Ⅰ一回やってみないと役に立つかわからないし、Ⅱちょっとでもやって、役に立ちたいと思ったと思う。</p>
<p>Bさんと同じ考えだと思う人は？</p> <p>★聴き合い、考えを深めている子ども達の姿が顕著に表れていると思われる部分</p>	<p>(B) なぜ植物を研究していたかわからないし、Ⅲ子どもが涙を流しているのに、なんでそれでも研究を続けるん？</p> <p>(C) Bさんと同じ考えで、Ⅲ子どもが悲しんでいるのをわかっていながらも、研究を続けた理由がわからない。だから、すごいとは思わない。</p>
<p>友だちの考えを聴き合う中で、宇市の研究への思いと自分が感じる家族への思いとを行き来し、考えている。</p>	<p>(D) Bさんとちょっと似ていて、研究をずっとして、子どもも心配していると思う。</p> <p>(E) 目標を考えていなかったから、できたと思う。目標を考えていたら、それを達成したら・・・。</p>
<p>目標がなければ、がんばれないの？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・それは、ちゃう。
<p>みんなは、目標ができたとしたら、がんばることができる？</p>	<p>(F) 続けたかはわからないけど、Ⅰ①未来のことを想像していたのかなと思って、村の人達はなんて言ったかわかんけど、 ②有名になりたかったんかわかんけど、 ③自分の目標が達成するまでやってみたかったから。</p>
<p>みんなは、目標ができたとしたら、がんばることができる？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・がんばれる。 ・できると思う。
<p>がんばれると思う人、がんばれないと思う人、それぞれの理由は言える？</p>	<p>(G) Ⅲ自分の力をふりしぼったら、やればできると思う。</p> <p>(H) 宇市さんはⅠ自分では研究をしたかったから、いつか自分も役に立てるように、あきらめずに研究を続けていたんだと思う。</p>

【視点Ⅱからの教員の見取り】

家族がづらい思いをしても、研究をあきらめなかった宇市と、自分の家族だったら、研究より家族を選ぶだろうと考える自分とを比較している。



【視点Ⅰからの教員の見取り】

研究をあきらめなかった理由について、
①自分達や村の未来を見据えていたのではないか、
②有名になりたかったのではないか、
③自分の目標が達成したかたのではないか、
という発言から、多面的に考えていることがわかる。



5 記述とヒアリングからの見取り

POINT

前述した発言からの見取り以外にも、様子を観察する、ヒアリングをする、記述を読むなどの方法を用いて見取る必要がある。それぞれの方法を組み合わせて見取ることにより、**評価の妥当性や信頼性を高めることができる**。以下は、本授業の終末で児童が書いたふり返りの記述である。

わたしは心の中で読んでみて、宇市さんは心の強い人だと思いました。理由は、村の人に「変わり者」と言われているのに、観察を続けているからです。もし、わたしがやってもすぐにあきてしまうと思います。好きなことでも、何か月も続かないと思いました。宇市さんは、本当にすごい人だと思いました。でも、私も一つだけあきらめなかったことがあります。それはマラソンです。つかれても「まだいける。歩いてはダメ！！もうすぐだから。」と心に語り続けると、15位になりました。

- 上記の記述から「研究をあきらめなかった宇市の姿と自分の経験や生活とを照らし合わせて考えを深めている。」と、IIの視点から見取ることができた。
- しかし、記述が唐突に終わっていることから、まだ書けなかった思いがあるのではと判断し、個別にヒアリングを行った。
- すると、「練習のときから、心の中で語り続けてよかった。だから、本番のときも自分に語り続けることができた。」という児童の新たな思いも見取ることができた。

6 見取りの生かし方

POINT

■評価は教員にとって指導の改善・充実に取り組むための重要な資料（本授業から考察）

- ・授業記録から、B、C、D児のやりとりをみると“聴き合い”の姿は現れており児童同士で考えを深めることができていた。
- ・しかし、「みんなは、目標ができたとしたら、がんばることができる？」という補助発問をきっかけとして、教材に対する考えから離れ、自身の経験や生活に基づいた考えに偏った部分がみられた。

教材に対する考えと自身の経験や生活に基づいた考えを、授業の中で、どのようなバランスで扱うのかを考慮する必要がある。このきっかけとなってしまった補助発問については、児童の声を聴いた上での即興性が求められるが、ねらいとする道徳的価値を念頭に置いた補助発問を心がけ工夫していく必要がある。

児童生徒が自身の成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなる評価をしていくとともに、評価を次のよりよい授業づくりに生かすことが大切である。

道徳教育実践推進協議会 副委員長
谷田 増幸

【西脇市立重春小学校の取組】
道徳科における評価は、指導法の工夫と同時に各学校における実践課題であることは確かである。重春小学校における実践研究の特徴は、評価研究を中心据えながらも、どのような点に志向したところにある。児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子をどのように見取るのか、より具体的には学習活動の中で評価の視点や学習活動の試行錯誤の過程をこの事例から見取ることができ、学習指導案の中に「聴き合う山場」や自身を振り返る場が設定されている。もちろん、個別のヒアリングの実施にもあるように、それらを固定的に捉えているわけでもない。ただ、「聴き合い、考えを深めている子ども達の姿」を見取ろうとする、まずと授業の構想段階でしっかりとした教材研究や発問の吟味、展開の工夫などが求められるのである。重春小学校の強みは、そのような研究推進に直向きに取り組む先生方一人一人の姿勢にある。是非、重春小学校での研修会の様子を一度ご覧いただきたいと思う。真剣さゆえに厳しいけれど、熱意が伝わってくる。そこにしっかりとした参加者の“学び”がある。

学校全体で取り組んだ道德教育～校内道德研修6年間の積み上げ～ 【 加西市立泉中学校の実践事例 】

1 泉中学校道德教育の目指すこと

(1) 対話によって深める——Teach よりも Catch

道德授業ができるようになるには、生徒の気持ちや思いがわかることが必要である。生徒が何気なく出している道德性をも敏感に感じられなければならない。道德授業では、黒板に向かってする授業は成立しない。「Teach よりも Catch」と言われるように、教員が子どもの話を聞かないとできない。教えるのではなく子どもの発言を受容し、子どもの話を対話によって深めていかないとできない。

(2) 子どもの内面に迫る——教員の姿勢

道德の授業は、資料、指導法や指導理論が大切なのは勿論だが、最終的には指導者である教員自身の人間的深さと質が大切になる。生徒達にとって一番の道德的環境は教員である。道德教育は、左脳的(理屈)でなく右脳的(心の指導)な指導であり、心の指導が行動へ表れていく。

共に考え、悩み、夢や感動を共有するという教員の姿勢は、道德授業に限定される姿勢ではないはずである。道德の授業づくりができるようになると、教科授業づくりも、生徒指導も変わってくる。理屈や行動の指導でなく、生徒の心へ訴える教員の心のこもった指導をすることができるようになる。道德授業が本物になると学校が落ち着いていく。教科授業が変わり、教員の姿勢が変わり、子どもの内面に迫ることができるようになる。その積み重ねが子どもと教員の関係を変えていき、学校の落ち着きへとつながっていく。道德教育を通して教員も学校も変わっていく。

2 具体的実践

(1) 推進体制

本校は、平成 25・26 年度に加西市指定の道德教育研究発表会を行った。

研究主題は「他を思いやり とともに伸びる ころころ豊かな生徒の育成 ～道德を核にした学びの充実～」であった。それ以後、現在も基本的にはこのときの体制と研究推進を継続し、研究推進委員会の下に、「道德部会」「泉中教育部会」「教師力向上部会」を設置している。

【道德部会】

①構成

道德教育推進教師を中心に、各学年の道德担当で形成し、研究推進委員会と連携しながら、道德教育の取組全般の指導と実務を行っている。特に学年道德担当者は、担任団の中心となって道德教育を学んでほしい若手教員を指名する。

②内容

道德教育に関する研究

- ・ 道德アンケート
- ・ 全体計画
- ・ 指導計画
- ・ 道德読み物資料
- ・ 指導案の型
- ・ 道德授業（発問、授業の流れ、板書、ワークシート）

(2) 研修のスタート（平成 25・26 年度の概要）

年	期	校内職員研修	外部研修及び講師招聘研修	研究推進委員会
25	1 学期	・学年別道徳授業研究① (担任授業・学年教員参観、授業研究会)	・県立研修所公開講座 (3名受講) ・講話「道徳の基礎と読み物資料の読み方」 ・講話「今の子ども達の課題について考える」	①現状、目指すもの ②研究推進日程
	2 学期	・学年別道徳授業研究② ・研修「板書について」	・道徳示範授業「一冊のノート」と講演	③部会の方向性 ④テーマ決定 ⑤授業研について感想等
	3 学期	☐中間発表 1年・2年各1クラス授業と授業研究会		⑥中間発表に向けて ⑦研究授業に向けて
26	1 学期	・学年シャッフル授業・事後研修 (学年で一つの教材を検討し代表が授業を行う) ・ローテーション授業① ・学年別道徳授業研究③	・講話「道徳教育の基礎・基本」 ・講話「研究授業・道徳授業の進め方」	⑧本年度の取組 ⑨授業研に向けて ⑩研究大会に向けて ⑪研究発表資料決定 ⑫⑬冊子原稿チェック
	2 学期	・ローテーション授業② ☐研究発表会 全9クラス授業公開と講演	・指導案検討	⑭⑮当日にむけて

(3) 継続——道徳授業研修会（平成 27～30 年度）

現在では、校内研修として、道徳授業研修会を年間5回実施。4回の提案授業では、研究推進委員会から授業者を指名・依頼して行っている。

1 学期は、異動してきた職員への提示と泉中の道徳授業の確認となる提案授業。

2 学期は、道徳教育の中心となってほしい教員による提案授業。

3 学期は、一年間の道徳と学級経営のまとめとしての提案授業とそれぞれを位置づけている。

これら提案授業後に、講師による研修を重ねることで、授業者が変わっても同じ道徳授業が学校全体として展開できつつある。その中で泉中の現状にあった泉中の道徳が確立されてきている。

年度	1 学期	2 学期	3 学期
27		提案授業① 校内提案授業② 兼初任者研修	提案授業③
28	提案授業①	提案授業②	提案授業③ 提案授業④
29	提案授業① 評価研修 (8月)	提案授業② 提案授業③	提案授業④
30	提案授業① 教材の読み研修 (8月)	提案授業② 提案授業③	提案授業④

(4) 年間指導計画の作成と活用

①道徳アンケート実施

校区の小6は2月に、中1、2は3月に道徳アンケートを行う。アンケートは内容項目別に集計し、前年度のアンケート結果と比較しながら、各学年の生徒の変化や課題である内容項目を確認し、次年度の年間指導計画に反映させる。

②資料の評価・選択

授業者の感想、生徒の様子や感想、助言者が授業を見て感じたこと等をもとに学年で協議し、次年度に取り扱う資料としての評価を行い、年間指導計画に記入する。兵庫版道徳教育副読本「心かがやく」を中心に、「私たちの道徳」、文科省読み物資料を入れるようにし、副読本以外の資料は、評価の高い定番資料を中心に学年割りをし、3年間で計画的に活用している。

※上記①②をもとにして、3月に現学年が次学年の年間指導計画を組み次学年へ提案する。提案を受けた学年は、提案をもとに学年の生徒の実情や年間行事等を加味し修正する。

(5) 授業づくり—共通理解

①授業準備から振り返りまでの流れ

POINT

授業づくりは資料の読み込みから始まる。読み込んだ資料を『教材分析シート』に記入することで、資料を理解し把握していく。このときに、学習指導要領にある主題(言葉)の意味を吟味し、内容項目について深く理解する。『教材分析シート』をもとに指導案(略案)を作成し学年の教員に配布し、アドバイスをもらう。発問等必要な掲示物を作成する。

助言者は授業記録、板書写真等をとる。授業記録、板書写真、生徒のワークシート等とあわせて、授業者と助言者で事後研修を行う。生徒のワークシートを整理し、学級通信等で授業の学びを生徒へ還元していく。

②授業と参観のポイント

POINT

【目指す授業】

- ★型に縛られず対話に時間をかけ、対話によって人間的な生き方を味わう時間にする。
- ★授業で求めているのは、口先の左脳的な正しいことでなく、自分のこととして深く考えること。
- ・ 範読は、生徒が話にのめり込めるよう、生徒の思考の速度、間、調子を意識する。
- ・ 話を捉えるための基本発問を1～2問、主題に迫る中心発問を行う。
- ・ 中心発問に時間をかけ、対話を重視した「問い返し」により生徒の発言で主題へ迫る。
- ・ 余韻を残し落ち着いた雰囲気の中で、感想と自己の振り返りの時間を十分に確保する。



【授業の様子】

【授業のチェックポイント】

- ◆ 教員の問いが、生徒に正確にきちんと伝わっているか。
- ◆ 教員は、生徒の発言(思い)をしっかりきいて受け止めているか。
- ◆ 教員の「問い返し」は、ねらいに迫るための適切な「問い返し」になっているか。

③ローテーション授業の実施

- ・毎時間、各授業者に対して、学年の教員を助言者として割り当てる。
- ・学期初めと終わりは担任が授業をし、時期をみてローテーション授業を行う。
- ・担任によるローテーション授業、副担も含む学年教員によるローテーション授業を行う。
- ・マンネリや学年の偏りをなくすため、年に数回、他学年と助言者をシャッフルする。

3 成果と課題（教員のアンケートから）

【成果】

- 担任が独自に道徳をするのではなく、学年全体で道徳授業を作り上げている雰囲気が出た。
- 放課後や空き時間に、資料や道徳的価値観についての職員の雑談が増えた。
- 授業の振り返りに熱が入り、教員としての姿勢や人としての在り方にまで、議論する姿が見られる。
- 道徳の授業が好きな生徒、教員が増え、自分の意見を躊躇なく発言できる雰囲気が出た。
- 教科授業や SHR 等もオープンな雰囲気が出た。教員同士が気軽に参観し合えるようになった。
- 学校全体で道徳を通して、生徒を育て上げる雰囲気が出来上がった。
- 道徳を核とした学びが教員自身を成長させ表面的な行動の指導にならないことを意識している。
- 生徒に寄り添い内面に迫る指導の意識が、教科指導や生徒指導等の教育全般に浸透している。
- 資料を通して、人生を深く味わう雰囲気が、教員間で漂うようになった。
- 子どもと教員が共に、生き方について深く考える時間に近づきつつある。



【研修会の様子】

【課題】

- 資料の素晴らしさや主題が感じ取りにくく、資料の解説を必要とする教員が増えつつある。
- 子ども達の学びを実生活の中で捉え、生徒を導いていく教員の力量が追いついていない。
- 資料の感動や実生活の中での道徳観といった教員の人としての厚みや感性をどう体得させるか。
- 教員の異動が毎年ある中で、取組を継続していくこと、学びの質を落とさないことの難しさ。

【加西市立泉中学校の取組】

学校として道徳教育をどのように位置づけるかを明確にしてこそ教育は本物になる。教育の一番の環境は教員だとし、教員の人間性の深さと質を大切なものとして道徳教育に取り組む姿勢が、継続できている大きな要因である。

年度ごとに教員の入れ替わりがある中で、研究を始めた時の推進体制を維持し、それぞれの学年の若手教員を道徳担当に指名すること、年間5回にわたる授業研究会も、学期ごとに意図をもって授業者を指名することが学校として組織的に取り組んでいることの証である。

また、目指す授業や授業のチェックなど共通理解事項を基に普段から道徳の授業をもとにした研修を積んでいるからこそ、提案授業の前には、学年で教材分析をし、指導案を練り上げる協働体制もできているのである。助言者制度も工夫されており、板書の写真、ワークシートの整理など、これからの評価についても担任一人ではなく、学年、学校として取り組んでいける可能性を持っている。

三代の校長のリーダーシップのもとに研究推進委員会、道徳部会を核として全員で積み上げてきた道徳教育、道徳の時間を通して、これからも子どもの内面を育てていただきたい。

道徳教育実践推進協議会 委員

行本 美千子

4 道徳教育拠点校育成支援事業実施推進地域及び推進校の取組

【 川西市立川西南中学校の取組 】

研究主題

「道徳的实践力を高める道徳授業の展開
～『教える道徳』から『考え、議論する道徳』へ授業の質的転換～」

【対話で深める】

- ◆ 道徳的な問題場面を焦点化し、「問い」や「対話」を通して、生徒自身が自分のこととして深く考え、「よりよい生き方」や「豊かな生き方」を見つめることができる授業のあり方「生徒が主体となる対話の手立て」について、実践を重ねた。

実践事例

問い返しの準備と意識改革

【「問い返し」の準備】

- ・ 中心発問を精選し、生徒が主体的に考える時間を確保する。
- ・ 対話を通し道徳的価値を深めていくために、生徒の発言を事前に多く予測し分類する。
- ・ 指導案に、発問に対する予想される生徒の発言を5つ以上記載し、その発問に対する「問い返し」を考察し、道徳的価値がより深まる工夫をする。

準備を行うことで、生徒の発言に対して「問い返し」の工夫ができるとともに、授業者にとっても授業の見通しができる。

【意識改革】

生徒の発言に次の別の質問をするのではなく、「それはどういうこと？」等、生徒の発言に対しての「問い返し」を徹底。

- ・ 生徒の言葉で語らせながらも、個人の考えをクラス全体に投げかけ、生徒全員を巻き込むことができた。
- ・ 「問い返し」が停滞したときは、工夫として教員や生徒の意見にうなずいている生徒を上手に活用し、それをクラス全体に広げていった。



【学習環境の工夫（コの字型）】

成果及び指導上のポイント

（●成果 ★指導上のポイント）

- 生徒の発言を予測し、有効な「問い返し」の準備をすることにより、授業のねらいにせまり、深めることができた。
- ★ 発問は「気持ち」を問う分と、「考え」を問う分を生徒が混同しないようにはっきりとわかりやすく伝えることが必要である。
- ★ 基本発問を、道徳上の問題点のおさえや主人公の心情（特に主人公の心の弱さ）に共感するなど、自我関与（授業を進めていくうちに生徒が主人公になっていくようにする）させるための発問と位置付ける。また状況理解だけの発問とならないように心がける。

【新温泉町立夢が丘中学校の取組】

研究主題

「生命を尊重し、よりよく生きようとする生徒の育成
～生徒の内面的な自覚を促す道徳授業をめざして～」

【対話（問い返し）で深める】

- ◆ 対話のある授業の実現に向け、生徒の発言の受容と有効な「問い返し」の工夫を行った。生徒が安心して発言ができるように、発言を「受容」「承認」した。生徒が深く考えられるように中心発問とともに、補助発問を工夫した上で授業に臨み、有効な「問い返し」の工夫を行った。

実践事例

受容と問い返しの工夫

「友情・信頼」に主題をおいた資料「アキラのケータイ」（出典：廣済堂あかつき）
生徒の発言を「受容」「承認」し、有効な「問い返し」により、生徒の考えを深めた。

（T：教員、S：生徒）

T：「二人から大切なものをもらった」とあるけど、何をもらったの？

S：友情を思う心。

T：友情をもらった。どういうものが友情なの？

S：言葉では表せないもの。

T：たとえばどんなもの？

S：関わり方・・・

T：どういう関わり方をするの？【深めるための問い返し】

【問い返している場面】

S：お互いが信頼できるような会話とか・・・

T：お互いでないといけない。一方通行ではだめだということかな。【受容・承認】
そのほかに何をもらったのかな？【「友情・信頼」の道徳価値を踏まえた問い返し】

S：友だちの絆。この人のためにとか、この人を大切に思う気持ちとか。



成果及び指導上のポイント

（●成果 ★指導上のポイント）

- 生徒の意見を「受容」「承認」する基本姿勢を継続することで、生徒が安心して発言できるようになり、対話が深まるようになった。
- 学習指導要領解説を丁寧に読み、事前に教材分析シートを活用して教材研究を行うことで、生徒への「問い返し」の幅が広がった。
- ★生徒の内面的な自覚を促すように受容・承認をすることで、考えを深めさせることが必要。
- ★学習指導要領解説の内容項目を読み込むことで、授業者のねらいを明確にし、問い返しを深めることになる。

【 洲本市立洲本第一・中川原小学校、洲浜中学校の取組 】

研究主題

「対話のある授業づくり」～問い返しの手法を中心に～

【授業記録の活用による対話のある授業づくり】

- ◆ 平成 29 年度の道徳教育実践研究事業の取組をベースに、教材分析による発問の工夫や思考を深化させる「問い返し」の手法、授業記録の活用による授業検証、評価等について更に研究を深め、道徳教育を積極的に推進し地域を牽引する教員の育成を図った。

実践事例

問い返しによる授業展開 「がむしゃらに」(出典：日本文教出版)

【事前研修】

- ・教材分析シートを使い、話の展開と道徳上の展開を構図にまとめ、中心発問について吟味した。「ヘンリーの強い意志と博之の弱い意志とを対比させ、物事に精一杯打ち込むことのすばらしさと、強い意志を持ってやりぬくことの大切さ」を考えさせる。

【授業】

- ・ねらいを達成するために、基本・中心発問での「問い返し」を、児童に寄り添いながら粘り強く行った。

中心発問「博之ががむしゃらに相撲の稽古に打ち込むようになったのはどうしてでしょう。」

児童：「アメリカ人のヘンリーが汗まみれになって稽古していたからです。」

「ヘンリーは言葉や食事で不安を抱えながらも相撲をしているのに、日本人の僕がやめたら。」

児童：「ぼくより後に入ってきたヘンリーが、汗まみれになっているのに、ぼくはなぜ練習していないんだろう。」

教員：「別に練習せんでもいいんじゃない。逃げ出したんやから。」【問い返し】

児童：「ひろゆきは、感動していた(から)。」

教員：「ヘンリーに感動したの。」【問い返し】

児童：「ヘンリーはがんばって練習しているのに、ぼくだけ逃げ出すのは格好悪い。」「自分だけサボっているようで情けない。」

【事後研修】

- ・授業記録を活用し、一つ一つの「問い返し」が適切であったかそれにより児童の思考に深まりや広がりが見られたかを検証した結果、対話のある授業にするためにはより深い教材分析が必要であることが分かる。



【授業研究会後の研修会】

成果及び指導上のポイント

(●成果 ★指導上のポイント)

- 道徳科における「対話的な学び」について、問い返しによる思考の深化をめざす授業スタイルが確立できた。また、それを校内だけでなく洲浜中学校区で共有できた。
- 教材分析シートで教材分析を繰り返すことで指導内容が明確になり、主題に迫る授業の組み立てができた。
- ★道徳科における「対話的な学び」の視点と、子ども達に考えさせたい道徳的価値を授業者がしっかりと持つことが大切である。
- ★効果的な「問い返し」は、児童生徒の発言の予想と「発問」の準備が必要である。

【 赤穂市立坂越中学校、坂越・高雄小学校の取組 】

研究主題

『主体的に学び 仲間と共に よりよく生きようとする子どもの育成』
～深い学びの中で互いの生き方を高める道徳教育～

【TT(ティームティーチング)の取組】

- ◆ 「TTによる道徳授業」という授業形態での授業づくりと、「ローテーション授業」による担任だけではなく全教員で道徳の授業を推進していく体制を整えた。

実践事例

(授業力向上の実践)

TTによる道徳授業の実施

事前に「TTによる模擬授業」を実施し、教員間の役割分担や、補助発問のタイミング等の確認を行い、その反省を踏まえて学習指導案の再検討・再構成を進めた。



【模擬授業の様子】

・T1が授業を展開していく中で、T2が補助発問を行い児童生徒の思考に新たな視点を加わえ児童生徒の心を揺さぶる工夫をした。

・TTの授業により、資料の読み取りに終始しない「対話」によるスムーズな展開ができた。

・TTの場合、複数の教員が机間指導に回ることができ、きめ細かな支援を行うことで、児童生徒一人一人の思いや考えに気づくことができ、それを意図的に取り上げることでクラス全体に意見を共有することができた。



【TTの様子】



【他者との対話の様子】

成果及び指導上のポイント

(●成果 ★指導上のポイント)

- TT実施にあたっては、教員のローテーション授業を実施し、担任だけではなく、全教員で道徳の授業を行う体制を整えることができた。
- 教員の意見交流が深まることにより、全教員(特に担任を持たない若い教員)の授業力向上につながった。
- ★児童生徒の多面的・多角的な思考を促すために、全教科において日常的に素直に自分の意見を述べ、他者の意見を聞きながら、相互に議論できる資質を養っていくことが大切である。
- ★意図的に教員が「問い返し」を行い、揺さぶりをかけることによって、生徒の本音を引き出し、していくことが必要である。

【 尼崎市立大庄小学校の取組 】

研究主題

「かかわりを生かし、学び合う道徳科の時間を通して」

【授業力向上】

- ◆ 教材分析シートを活用し、教材研究を深める（授業前）。問い返しの工夫による対話のある授業を目指す（授業）。授業後の研究会で、授業記録を基に主として「先生の問いは、ねらいに迫るために本当に有効な問いであったか」「先生の問い返しは、より深く考えるために有効であったか」について考え、授業改善を図る（授業後）。

実践事例

授業後の研究会 【実践事例】 「いのりの手」（学研4年）

4～5人でグループを作り、模造紙の拡大指導案に、良い点、改善すべき点を貼り付けていき話し合う。そして話し合いの内容を発表する。

視点①「先生の問いは、ねらいに迫るために本当に有効な問いであったか」

- ・基本発問1つと中心発問で発問の数を絞ったのはよかった。
- ・中心発問「どんな思いでハンスの手をかいていたでしょう」にしているが、絵を描いている時よりも、「どう思って君の手をぼくにかかせてくれ、と言ったのでしょうか」という問いの方がいいのではないか。中心発問で主題が考えられなかったらだめ。
- ・「いのり手」の写真を導入か終末で有効活用できるのでは。



【板書用掲示物の保存】

視点②「先生の問い返しは、より深く考えるために有効であったか」

- ・発問して、児童が答えたものを先生がまとめてしまった。
- ・指導案には、予想される児童の反応に対して、どう問い返すかをせっかく準備しているのにいかせなかった。

成果及び指導上のポイント

（●成果 ★指導上のポイント）

- 授業後の研究会で、授業記録を基に考えることで、授業改善を図ることができた。

★年度初めに資料分析の方法を研修することで、異動してきた教員も授業の進め方を学ぶようにしている。

【丹波市立春日中学校・進修小学校の取組】

研究主題

「成長を認め、励ます評価の研究
～自分の生き方を考え、対話する道徳を目指して～」

【評価の研究】

- ◆ 道徳科の評価に向けて重視する2つの視点、①「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」、②「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」について見取る実践を行った。

実践事例

評価に向けて重視する2つの視点

「二人の弟子」(出典：文部科学省「私たちの道徳・中学校」)

【視点の見取り方法】

[視点①(多面的・多角的な見方へと発展しているか)の見取り：観察]

友だちの「道信は、後悔しているのでは」という発言を聞いて、「そうか」とつぶやき、うなずいている様子から、道信の思いも視野に入れ考えようとしていることを見取った。



[視点②(道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか)の見取り：発言]

「人間は過ちを犯すものであり、その弱さを知り克服することが大事であると分かった。」
「学級委員長になって苦手だった指示が出せるようになった。」という発言から、教材の道徳的価値を理解し、自分の弱さや醜さに気づき、それを克服しようとした経験について発言することができていた。



〈本時の活動で見られる生徒の学習活動のまとめ〉

「二人の弟子」の学習では、友だちの発言をうなずきながら聞き、道信の心境の変化をとらえ、「人間は過ちを犯すものであり、その弱さを知り克服することが大事である」ことに気づき、自分のこととして考えようとしていた。

成果及び指導上のポイント

(●成果 ★指導上のポイント)

- ねらいとする道徳的価値について、評価の視点を持ち、それに迫るための展開や発問を工夫することで、児童生徒の発言や記述の中で、多様な考え方を見取り、評価へとつなげることができた。
- ★個と集団を活かしながら、ねらいに深くせまることができる展開(中心発問、補助発問、問い返し)を工夫するとともに、道徳科の評価に向けて重視する視点を明確にし、共通理解した上で見取ることが大切である。

【 神戸市立唐櫃中学校の取組 】

研究主題 「考え、議論する道徳授業の創造 ～学び合い支え合う授業づくり～」

【ローテーション授業と評価】

◆ 「特別の教科 道徳（道徳科）」の実施に向けて、学年ごとに全教員がローテーション授業を行い、評価システムの構築を意図して、観察記録法の工夫を試みる研究実践を行った。

複数の教員が教室に入り、授業での生徒の見取りを中心に、「生徒の発言」や「つぶやき」、「心情の変化」等を記録した。その教員の記録と、生徒の振り返り（ワークシート）とを併用して評価を行うことで、客観性・妥当性・信頼性のある評価を狙った。

実践事例

ワークシートと教員の見取り

「仏の銀蔵」（出典：文部科学省）

・ Aさんに対する教員の記録 【教員の見取りより】

友人の意見から、お天道様を「正しい心」と捉え、「本当の自分は」など、その意味について深く考え直している発言をしていた。

＋ 客観性・妥当性・信頼性

・ Aさんの記述 【ワークシートより】

「お天道様とは、自分の中にある正しい心。それは、本当の自分でもあると思う。」



【授業の様子】

成果及び指導上のポイント （●成果 ★指導上のポイント）

●観察記録法による評価方法をとるシステムが構築でき、客観性・妥当性・信頼性のある評価につなげることができた。

★生徒の見取りについては、授業者と補助教員との共通理解が欠かせない。また、発言の少ない生徒への見取りについては、個別に聞き取るなどの工夫を研究することが必要である。

★評価を行うためには、生徒の情報を得ることが欠かせない。授業で見せた表情や態度などの観察による見取りを行うためには、組織的・計画的な体制作りが必要である。

★授業で生徒に活発な発言につながる発問や、生徒の発言に対する教員の「問い返し」を工夫することが大切である。

【 稲美町立天満東小学校の取組 】

研究主題

「道徳科の指導方法の工夫と評価の在り方について」

【評価についての研修】

- ◆ 昨年度、教材分析の仕方や指導方法、評価の仕方等の研修を行ったことを基に、本年度は、指導方法の工夫と評価のあり方についての研修を行った。具体的には、①児童生徒の成長を見取る際に重視する視点を意識した「考え、議論する道徳」を展開するための発問方法、②道徳科の授業を積み重ねたことによる「道徳性に係る児童生徒の成長の様子」を見取り、励ます個人内評価として、発達段階に応じた記述により表現する方法を研修の柱とし実施した。

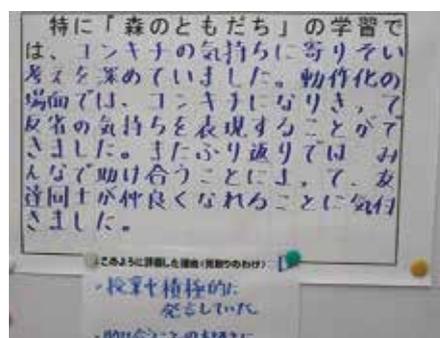
実践事例

評価の工夫

小・中を問わず他校（中学校校区外）からも多くの参加者を募り、学校種や経験年数が偏らないようグループを形成し、個々の見取りの相違点や共通点に気づくことで、評価に対する認識を深める。

「森のともだち」（出典：廣済堂あかつき）

- ・評価についてグループ討議を行い、授業中の児童の様子等を見取ったことを基に、励ます個人内評価を意識した記述をグループ毎に作成。
- ・設定された文字数の中で、児童の学習状況と道徳性に係る成長の様子について、特に顕著と認められる具体的な状況を記述。
- ・学識経験者である講師から、グループ毎の評価の比較検討や、励ます個人内評価を意識した記述方法について指導助言をもらい認識を共有する。



【研修会で作成した評価案】

成果及び指導上のポイント

（●成果 ★指導上のポイント）

- 授業を参観している教員も児童生徒を見取り、評価文を作成することにより、主発問・補助発問の重要性を再確認した。
- 事後研修会で、評価結果についてグループ討議を行ったことにより、評価の視点などについて共通認識を持つことや実践事例を蓄積することが出来た。
- ★研修のテーマを明確にし、事前に研究授業での見るポイントを共通理解する。
- ★評価のために集める資料や評価方法等も明確にし、それらを組織的・協働的に行っていくことが重要である。

【 加東市立東条中学校の取組 】

研究主題 『『考え、議論する道徳』の授業づくりと評価の実践』

【評価の共通理解】

- ◆ 「読み物教材」を活用した授業づくりを行い、道徳の評価について研究を進める。
「道徳科」におけるワークシートや、授業中の発言等を活用した記述評価について検討し、学校全体で評価の共通理解を図る。

実践事例

研修で評価の共通理解をはかる

研究授業において見取る生徒を予め数人設定し、授業後の研修会で 150 字程度の記述評価を行う。

※学年団（3 学年）で生徒 2 人を評価し、6 人の記述評価について全体で検討）

【留意点】

- ①根拠となる発言・ワークシートの記述を短冊に書く。
- ②到達度評価ではないことを意識する。
例えば「理解を深めることができた」
→「理解を深めようとしている」



【研修会の様子】

【東条中学校での共通理解（案）の一例】

- ・必ず、複数の目で記述評価を確認し、生徒や保護者の立場にも立って検討することが必要である。
- ・道徳科の内容項目を記述評価にそのまま取り入れられない内容項目もあるので、十分に配慮する。（例えば「愛国心が高まりました」「礼儀について正しく理解している」等は適切ではない。
- ・生徒や保護者に説明を求められた時に答えられるよう、評価の根拠を必ず持つておく。
- ・総合所見との差別化を図る。「熱心にそうじができるようになった」は、道徳科の評価としては適さない。

成果及び指導上のポイント （●成果 ★指導上のポイント）

- 意見交流をしながら、記述評価文例を考えることで、推奨できる表現、避けた方が良い表現を学校全体で共有することができた。
- 一度の研修では身につかないので、今後も継続して研修を行う必要があると、学校全体で共有できた。
- ★東条中学校道徳科記述評価ルールづくりに取り組むことで、学校全体の意識が高まり、評価の改善につながる。

【 姫路市（広畑第二小学校）の取組 】

研究主題

「授業づくりと評価」

【授業づくりと評価】

- ◆ 「授業づくりと評価」について小学校道徳・人権教育推進担当者会主催の授業研究会や講義により、授業と評価の見直しを行い、継続してよりよい「授業づくりと評価」について教員が主体的に取り組めるようにした。さらに小学校の授業実践から中学校への「授業づくりと評価」につながるようにした。

実践事例

「授業と評価の一体化」を意識

【授業づくりのポイント】

- ・教材と内容項目について学習指導要領解説を熟読し、本時の「ねらい」を明確にもった授業展開を考え、授業を行った。
- ・児童が授業の最後のワークシート等の振り返りや発言等から、どれだけ本時の「ねらい」にせまり、深めることができたかを分析した。



【授業者自身の振り返り】

【評価】

- ・「児童への評価（通知表と指導要録）」と「授業者自身への評価（授業づくり）」という2つの視点で評価を捉えた授業づくりに取り組んだ。
- ・「授業者自身への評価（授業づくり）」について、例えば、授業者が授業前に具体的に児童の言葉で考えた記述や発言等が、「対話」を通してどのように変化していったのかを、意識的に見取り振り返った。



学習指導過程で、ねらいとする道徳的価値について、「理解を深めることができたか」、「自己を見つめているか」、「自己の生き方について考えを深めているかどうか」など、指導の実際を評価することを意識できるようになった。

成果及び指導上のポイント

（●成果 ★指導上のポイント）

- 教員自身が自分の授業づくりを振り返ろうとする意識が高まり、質の高い授業こそが、よりよい評価につながることを再確認できた。
- ★発達段階や教材に応じて、児童生徒にとって「主体的に考え、対話で深める道徳」をめざし、教員が児童の反応（発言や記述など）を十分に考えた「授業づくり」を行う。
- ★児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取り、授業に対する評価と改善を行う上で、学習指導の過程や指導方法を振り返ることが重要である。

5 内容項目の指導の観点

	小学校	小学校第1学年及び第2学年(19)	小学校第3学年及び第4学年(20)
A主として自分自身に関すること	善悪の判断、自律、自由と責任	よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うこと。	正しいと判断したことは、自信をもって行うこと。
	正直、誠実	うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活すること。	過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること。
	節度、節制	健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	自分でできることは自分でやり、安全に気を付け、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
	個性の伸長	自分の特徴に気付くこと。	自分の特徴に気付き、長所を伸ばすこと。
	希望と勇気、努力と強い意志	自分のやるべき勉強や仕事をしっかり行うこと。	自分でやろうと決めた目標に向かって、強い意志をもち、粘り強くやり抜くこと。
	真理の探究		
B主として人との関わりに関すること	親切、思いやり	身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。	相手のことを思いやり、進んで親切にすること。
	感謝	家族など日頃世話になっている人々に感謝すること。	家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接すること。
	礼儀	気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接すること。	礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接すること。
	友情、信頼	友達と仲よくし、助け合うこと。	友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。
	相互理解、寛容		自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にすること。
C主として集団や社会との関わりに関すること	規則の尊重	約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。	約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること。
	公正、公平、社会正義	自分の好き嫌いとらわれないで接すること。	誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接すること。
	勤労、公共の精神	働くことのよさを知り、みんなのために働くこと。	働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと。
	家族愛、家庭生活の充実	父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つこと。	父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくること。
	よりよい学校生活、集団生活の充実	先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくすること。	先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級や学校をつくること。
	伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度	我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと。	我が国や郷土の伝統と文化を大切に、国や郷土を愛する心をもつこと。
	国際理解、国際親善	他国の人々や文化に親しむこと。	他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。
D主として生命や自然、崇高なものに関すること	生命の尊さ	生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。	生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。
	自然愛護	身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接すること。	自然のすばらしさや不思議さを感じ取り、自然や動植物を大切にすること。
	感動、畏敬の念	美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。	美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。
	よりよく生きる喜び		

小学校第5学年及び第6学年(22)	中学校(22)	中学校
自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。 誠実に明るいいで生活すること。	自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。	自主、自律、自由と責任
安全に気を付けることや、生活習慣の大切さについて理解し、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛けること。	望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をする。	節度、節制
自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと。	自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。	向上心、個性の伸長
より高い目標を立て、希望と勇気を持ち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと。	より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げる。	希望と勇気 克己と強い意志
真理を大切にし、物事を探究しようとする心をもつこと。	真理を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。	真理の探究 創造
誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。 日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。	思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。	思いやり、感謝
時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接すること。	礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。	礼儀
友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。	友情の尊さを理解して心から信頼できる友達を持ち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。	友情、信頼
自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。	相互理解、寛容
法やさまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと。	法や決まりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。	遵法精神、公德心
誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること。	正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。	公正、公平、社会正義
働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役に立つことをすること。	社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。 勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること。	社会参画、公共の精神 勤労
父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをすること。	父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。	家族愛、家庭生活の充実
先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくることとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。	教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚を持ち、協力し合ってよりよい校風をつくることとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。	よりよい学校生活、 集団生活の充実
我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。	郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。	郷土の伝統と文化の尊重、 郷土を愛する態度
	優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。	我が国の伝統と文化の尊重、 国を愛する態度
他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めること。	世界の中の日本人としての自覚を持ち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。	国際理解、国際貢献
生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえないものであることを理解し、生命を尊重すること。	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえない生命を尊重すること。	生命の尊さ
自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。	自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること。	自然愛護
美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。	美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。	感動、畏敬の念
よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じる。	人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと。	よりよく生きる喜び

義務教育課ホームページ掲載

- 指導資料 「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて③ (平成 30 年 3 月)
平成 29 年度道徳教育実践研究事業のまとめ
- 指導資料 「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて② (平成 29 年 3 月)
平成 28 年度道徳教育実践研究事業のまとめ
- 指導資料 「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて (平成 28 年 3 月)
平成 27 年度道徳教育実践研究事業のまとめ
- 指導資料 「道徳の時間」を要とした道徳教育の充実 (平成 27 年 3 月)
平成 26 年度道徳教育実践研究事業のまとめ
- 指導資料 「道徳の時間」の充実のために (平成 26 年 3 月)
平成 25 年度道徳教育実践研究事業のまとめ
- 指導資料 副読本の効果的な実践のために (平成 25 年 3 月)
－平成 23 年度道徳教育推進拠点校事業、平成 24 年度道徳教育推進地域・推進校事業－
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~gimu-bo/doutoku/shidoushiryou.pdf>
- 平成 23 年度「兵庫県道徳教育推進協議会」提言 (平成 24 年 3 月)
「深まり」と「つながり」のある道徳教育 －「兵庫版道徳教育副読本」の有効な活用をめざして－
- 指導の手引き「生命を尊重する心」と「規範意識」の育成 (平成 22 年 3 月)

兵庫県道徳教育 Web ページ

検索

<https://www.hyogo-c.ed.jp/~gimu-bo/index.html>

文部科学省

- 道徳教育アーカイブ ～「道徳科」の全面実施に向けて～

道徳教育アーカイブ

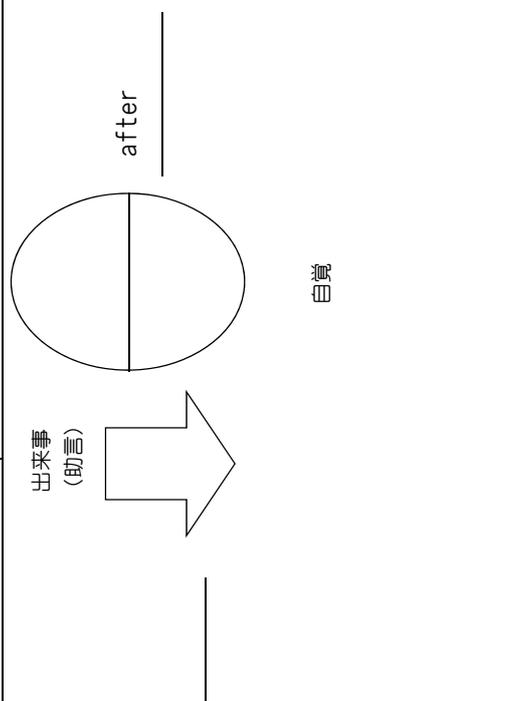
検索

<https://doutoku.mext.go.jp>

平成30年度 道徳教育実践推進協議会委員

- | | | | |
|--------|------|-------|------------------------------|
| ●学識経験者 | 委員長 | 横山 利弘 | 元関西学院大学教授 |
| | 副委員長 | 谷田 増幸 | 兵庫教育大学大学院教授 |
| | | 行本美千子 | 兵庫県中学校教育研究会道徳部会顧問 |
| | | 大塚 昭宏 | 兵庫教育文化研究所事務局長 |
| ●学校関係者 | | 野々口竜己 | 小学校教育研究会道徳部会理事 (丹波市立和田小学校長) |
| | | 田中 重明 | 近畿中学校道徳教育研究会会長 (神戸市立北神戸中学校長) |
| | | 楠田 範子 | 西宮市立苦楽園小学校教諭 |
| | | 中村 浩司 | 小野市立旭丘中学校教諭 |
| | | 谷本 晃史 | 新温泉町立浜坂中学校教諭 |
| | | 岡田 康孝 | 洲本市立安乎小学校主幹教諭 |
| ●行政 | | 藤野 光裕 | 姫路市教育委員会学校教育部人権教育課指導主事 |

＜教材分析シート＞（主人公が道徳的価値の自覚をする場合）

	教材名（出典）		5	主題・内容項目 中心発問以外の場面の発問 （※場面の数は教材（資料）による）	予想される児童生徒の反応（答）
1	教材を読む （骨格をつかむ）	①生き方を自覚（変化）したのは誰か（主人公） ②生き方を自覚（変化）することになった出来事（助言）は何か ③生き方を自覚（変化）するのはどこか	6	場面	-----
2	<構図> before _____  after _____		7	ねらい (A) _____ (B) _____ (C) _____ を主として育てる。	(道徳的に変化する) 主人公を通して
3	中心発問			※書き方 (A) 教材の活用を簡潔に表記する。(主人公が道徳的に変化する場合は「出来事（助言）」の部分を抜き出して表記する。) (B) 内容項目から適切に抜き出す。 (C) 一般的には道徳性の諸様相（道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度）を入れる。 ※道徳料の評価は、ねらいに準拠した評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として実施します。	
4	中心発問に対する 予想される児童 生徒の反応 (答え)	補助発問（道徳的価値をさらに深く考えられるように問いを準備する）	8	本時で考える道徳的価値 (上記「7」の(B)に記入した道徳的価値についての詳細)	

指導資料

道徳科の全面実施に向けて

平成 31 年 3 月

発 行 兵庫県教育委員会

連絡先 〒650-8567

神戸市中央区下山手通 5-10-1

TEL (078) 341-7711 (代表)

30教T1-004A5